

---

# 人工空間に生きる鎮守の森

---

## ——空間と身体感性論を通して

---

### 友安輝実

本論文のテーマは、筆者実家の神社が経験した「公共団体による鎮守の森潰し」という実体験から動機を得たものである。現在宗教法人所有の鎮守の森が、公共事業用地として削りとられているケースが年間5000～6000件にも及んでいる。現代的、都市的な視点で判断される「鎮守の森」の価値では、真の「鎮守の森の存在意義」を反映していない。畏怖や感謝の対象とされていた「鎮守の森」は、都市の緑を守る最後の砦である一方、都市化の波にはいとも簡単に滅び行く脆い一面があることを示す。そうした「畏怖や感謝の対象とされなくなった鎮守の森」の背景には、現代人の感性の鈍化に深い淵源があるとし、その「感性」を「空間」における「身体」の配置という観点から検証することとする。「空間の改変は人間の改変」であるという命題をもとに、現代の「鎮守の森」が有する複合的特殊性と「鈍化された感性の覚醒装置」としての側面があることを導きだし、本論文を結論づける。

## I章. 「都市空間」とは

「都市」が成立は、公共事業によっているところが大きい。桑子の言を借りると、都市空間とは「概念化された空間の寄せ集め」としての「価値を一元化された貧しい空間」であるといえる。

特に、巨大土木プロジェクトを中心に行われた戦後の公共事業は、功利性、近代的合理性、経済性、効率優先で、いたるところに同じような景観をつくり出したのである。もちろんその空間改変にあたっては、外なる自然（＝「空間」）と内なる自然（＝「人間」）は切り離されたものであり、外的環境の「自然」に対しても機械論的自然観の立場をとるものであった。空間の機能が資本の論理と結びつくとき、本来切れ目のない空間（自然）は、経済的機能によって分割され、単機能化される。それら個別の分断された空間には、人間の頭の中で考えられた一元化され平板化された概念区分を空間へと還元（半ば強制）するというプロセスをふむ。こうした空間改変は、谷をダムに沈め、沢を防砂ダムで埋め尽くした。山岳をぬって林道が建設され、多様性を極めた森林は、生育の速く用途の多様な杉や檜の純林への転換を余儀なくされた。工業用水供給基地という一元的コンセプトで支配された川は、魚が遡上できる川や子供達が足を濡らしながら遊べるような川ではなくなってしまった。

### i 節) 空間と身体に宿る「履歴」

これら一連のプロセスを空間の「履歴」という視点から眺めるとき、「空間改変」が削り取る多様な価値とは、その「空間」に宿っている「多様な履歴」が創出するものであることがわかる。

人間の身体の置かれた空間を「モノと心を媒体するものとしての空間」ということができるのは、自己をとらえるひとつの立場からの帰結である。それは、「空間でのこの身体の配置」を「わたし」と捉える立場から導き出される。配置の概念によって、自己と世界との不可分な関係を示すことができる。さらに、この「空間」は歴史的なできごとによって様々な意味づけを与えられている空間である。つまり、空間は歴史性をもつ。ここでは空間の歴史性を「空間の履歴」という概念で表わすこととする。

例えば、コンクリートで空間を分断し「工業用水供給基地」化された川には、「魚が遡上できる川であった履歴」、「川岸が水生生物や植物の住処であった履歴」、や「子供達が素足で川の流水に浸かり、息づく生命に触れうる場であったという履歴」等の多様な履歴が改変前には刻まれていたのである。

一方「履歴」とは、空間だけでなく人間にも蓄積されるものである。ある個人の履歴は、その個人がどこで生まれ、どこで教育を受け、どこで働いてきたかという歴史の記録のようなものである。自己の履歴が書き込まれていく過程とは、例えばある個人がある小学校へ入学したとする。その個人が入学した小学校は、その個人が入学する前から、あるところに位置し、その空間を維持してきた。よってその小学校という空間も履歴を持ち、その履歴は、その古い履歴を持つ空間と、その個人が会うことによって、その個人の履歴の新たなページが書き込まれるのだ。よって、履歴をもつ「空間」なしには、自己は存在しえないということがわかる。(桑子[1999:21-22]要約)

つまり、豊かな履歴を宿す「空間」に「身体」を配置するということは、取りも直さず自己の履歴も豊かさを獲得することである。

一元的かつ平板なコンセプトで支配された都市空間に身体を配置し、生きている現代人とは、実は「空間」の一元的かつ平板なコンセプトの命ずるまま行動を規制されている存在であるといえよう。延いては、「人間存在の一元化、平板化」が進行する事態となり、「機械のようにはたらくことを前提」とした世界理解や自己了解へと帰結する。

## ii 節) 現象としての「自然」を排除した都市空間

「自然」を定義するとき、それは「人工」と対比されるものであり、往々にして「自然環境」という「取り囲むもの」として認識されている。だが、「自然」を「外的環境」としての「空間」認識にのみの範疇で解するのであれば、それは「自然」という語の本質を捉えたとは言い難い。

「自然」には、外的な環境といった「外なる自然」があり、また、個人の中に見いだす内的な環境の「内なる自然」がある。人間とは、「外なる自然」との相即不離な運命共同体である以上、「内なる自然」の存在基盤は、「外なる自然」との根元的連続性によって立つのである。それは、空間(=外なる自然)と、人間(=内なる自然)の関係性からも明らかであろう。つまり我々自身もまた自然法則からは逃れられない(編み込まれた)存在であるとするならば、我々もまた「自然」である。この視点に立った「自然」概念は、「自然」を外的事物にのみ求めるのではなくて、内的世界理解へも牽引していくといった非常に重要な論点を含むものとして評価されるべきである。

ここでもう一つの「自然」概念としてあげたいのは、「現象としての自然」である。万物此の世に生をうけた瞬間から「生老病死」は必然のものとして関係してくる現象である。というより、「生老病死」を通過せずしての「命」など此の世にはないのである。換言するならば、「生老病死」に代表されるような「無常」そのものが、まさに「自然」の在り方そのものなのである。

無常な自然現象が「自然」の姿であり、その「無常」空間に身を逍遙させるのが本来の人間の在り方ならば、外なる自然と内なる自然の「無常」を共有する交感こそが、両者の根元的連続性の合致には不可欠である。

改めて「現象としての自然」という視座から都市空間を眺めた時、その「無常」の居場所があまりにも狭いことに気づかされる。自然界で永遠に分解されることのない（＝「死」の排除）プラスチックが氾濫し、アスファルトの道路には草木の芽生えるような場もない（＝「生」の排除）。化学薬品によって腐敗スピードをコントロールし、驚く程の長期保存を可能にした食品（＝「老」のコントロール）等、日常空間には剥き出しの「無常」は見つけにくい。一つの命が最期を迎える時、自然界の大きな循環の中に「死す」ことにより、「永遠の循環への吸収」という新たな「生」を獲得するといったように、「生老病死」が存在することで、あらゆる自然の動的平衡状態は保たれているのである。今や「生老病死」は自然のスピードに委ねるものではなく、「人間が決めるもの」となってしまった。時間概念も産業革命とともに産声をあげた「均質な時計の時間」が都市空間を支配し、機械のように動く合理的都市をコントロールするようになった。そうした外なる自然（＝「空間」）からの「生老病死」排除とは、内なる自然（＝人間）が「生老病死」に触れる機会が排除されるということであり、両者の「無常」という共通項でもって交感されていた「外なる自然」と「内なる自然」間の根元的連続性も感得されにくくなってしまふ。つまりは「感性」発揚の機会がなくなるということである。そういった意味で、現代我々の生きる「都市空間」とは、手つかずのスピードでゆらぐ自然現象が極端なまでに排除され、均質化・平板化されている空間であるといっても過言ではない。

## Ⅱ章. 感性とは

ここで「感性」を定義づけるとすれば、「空間（＝外なる自然）と、身体（＝内なる自然）の根元的連続性を捉える潜在能力」、「外なる自然との付き合いの能力」である。

感性が外なる自然の「空間」との関係適切に捉える時、人間の原始的反応が発揚される。それは理性の及ばぬ領域での働きであり、情動的な側面を特徴としてもつ。これは空間と身体の関係そのものが、その個人の心性そのものであり、視覚、聴覚、触覚、味覚、嗅覚などの諸感覚を具える身体を通して初めて可能なるプロセスである。中村は以下のように感性と現代社会をながめている。

感覚や感情、それに想像力や無意識、さらにはエロスや狂気など、一般に感性的なものや非理性的なものは、多くの場合そしてこれまで長い間、もっぱら非哲学的もしくは反哲学的なものだ、と思われてきた。あるいは、それらは、理性や思考の敵、人間を動物に近づける

もの、人間活動の劣った卑しい部分、ひとを誤らせ逸脱させる悪しき導き手である、と思われてきた。でないにしても、それらは、哲学にとってまったく中心からはずれたもの、辛うじて周辺部にあるもの、とみなされてきた。(中村[1997:1])

およそ感性の軽視、情念の軽蔑がわれわれ人間の生活と精神をどんなに危険な状態に追い込むものであるか、それは、いまや誰の目にも明らかであろう。科学技術の無計画なあるいは非社会的な使い方による自然環境の破壊と並行して、われわれのうちなる自然である感性や情念もまた荒廃にさらされている。感性や情念はわれわれのもっとも身近なエレメント、つまり生存の基盤である。だから、それが涸渇し、あるいは荒廃するとき、われわれは感情生活においてだけでなく、知的、理論的活動においても衰退するよりほかない。(中村[1997: iii])

つまり感性とは、理性よりもプリミティブであり、人間の存在基盤ともある基幹的位置にしめるものとして存在することが明らかである。感性が根元的であり、基幹的であるからこそ、我々人間にとって客体化して自覚しにくいものなのである。以下中村の言を引く。

……まず第一に言えることは、それ(=感性)が、社会的気分あるいはムードのように表面的、皮膚感覚的なものではなく、また多くの理論や社会意識のようにただ意識的、観念的に身につけられたものでもなくて、より深く身体化され、肉体化されているからであろう。そしてそこから、われわれの深く身についたものの感じ方は、われわれ自身の生まれながらのもの、自然的なもののように考えられることになるのである。しかしそれと同時にまた、<自然的>とは疑う余地のないわかりきったこと、自明であることをも意味している。それだけにわれわれは、自分の理論的な考えに対してよりも、ものの感じ方に対して、客体化して自覚することがいっそう難しい。そして客体化して自覚しにくいことから、感性の問題は手をつけられないまま放置されることが甚だ多くなるのである。(中村[1997:286-287])

感性が<自然的>であるがゆえに自覚されにくい性質をもつということは、我々の我々自身の感性への目が失われやすいということであり、その感性に何らかの<非自然的>徴候が映し出されない限り、意識下におかれぬものであることがわかる。感性とは、我々の生存に関わる非常に重要なエレメントであるにも関わらず、その重要性を自覚できにくいという厄介な一面も有るのである。だからこそ蔑ろにされやすいのである。

そして、感性とは空間内での身体的配置により感得できうるものであるのは前述の通りであるが、中村の指摘するように、「空間」が近代科学技術の誤った使用法によって決して好ましくない空間へと改変される(人工化、または破壊される)とき、我々の自己と空間の根元的連続性を捉える感性がその発揚を阻害される。まさにそのような空間に生きているのが、感性を鈍化させ続けている現代人なのだ。

以上、感性を涸渇させる都市空間を概観してきた。

### Ⅲ章. 鎮守の森とは

鎮守の森は、「神社の森」「神社を取り囲んでいる森」である。

神社の発生まで遡ると、そもそも神社には社や祠などの建築物はなかった。森や山、岩などの自然物が畏怖や感謝を感じる対象であったからだ。最初からあったのは、「森」であり、常設の本殿や拝殿ができるのは後の代のことであって、聖なる神は「樹木（神籠）」や、「岩石（磐座）」、「山（神奈備）」に鎮まっているとされていた。天津神が今日よく見かけるような高床式の建築物をもたらす以前は、もともと列島に住まっていたとされる国津神の聖地は「森」そのものであったことから明らかである。天津神の伝承を主に語る『記』『紀』にはその事実はあまり述べられていないが、風土記にはそのような原初の信仰の在り方が確認できる。例えば、『出雲国風土記』の秋鹿郡の条には、

女高野山。郡家の正西一十里二十歩なり。高さ一百八十丈、周り六里あり。…但、上頭に樹林有り。此は神社なり。（『神典』、1952頁より引用）

とあるように、古くから崇敬の対象となっていたものは樹林（＝森）であることがわかる。本居宣長の『古事記伝』でのカミの定義にも触れられているように、その崇敬形態は単なる多神教ではなく、人間はもとよりのこと、万物のいのちの尊厳を前提として、すべてのヒトとモノの生命を重視する万有生命信仰ともいうべき汎神論的要素が濃厚であった。（上田 at el. [2001:7-8]）そして「鎮守の森」とは、人間のそうした汎神論的精神根底によって禁足地・禁伐地・崇敬の聖地として崇められ、守り伝えられてきたのである。

現在、鎮守の森とされる森は全国に10万ほどである。本論冒頭でも言及した通り、鎮守の森の数や面積は年々激減しているのが現状で、宗教法人法と各神社規則に基づき神社本庁統理宛に提出される財産処分承認申請は、年間5000～6000件にも及んでいる。その約7割は、公共事業への用地提供に伴うもの（＝公共団体による鎮守の森潰し）がほとんどであり、毎年約20万平方メートル（東京ドーム5個分）が「道路用地」へと処分され、過去8年間では実に約200万平方メートルにも及ぶ。（『月刊若木』[2003:10]）

#### i 節) 神社合祀問題に対決した南方熊楠

こうした「公」による鎮守の森潰しは、明治期の行政改革の一環として行われた神社合祀問題を彷彿とさせる。

近代化を能率的に遂行するための戦略として、明治政府は急速な中央集権化をはかった。「市町村合併」はその行政的側面であり、「神社合祀」は国民教化の側面であった。

1871年、太政官布告により、全国の神社は、伊勢皇大神宮を頂点にすえ①官社―②府県社―③郷社―④村社―⑤無格社という5段階の格付けを実施。こうしたヒエラルキー的な「格付け」は、それまで明確な「格」概念などなかった神社体系に対して、皮肉にも「無格社や小さな社は合祀

や廃止してもよい」という論拠の提供につながってしまったのである。(鶴見[1981:222-223])

これら合祀は、県知事及び郡町村長に一任されたため、地方によって神社の統廃合の状況は異なった。これによって、1906年から1911年末までに全国でおよそ8万の村社が合併または廃止されたのである。(鶴見[1981:223]) 一任された県知事や郡町村長は、統廃合した社の件数が多いほど行政改革において業績をあげたと評価されるために、極めて達成困難な条件を地元住民に提示しては、むやみな合祀を断行していったのである。

さて、こうした公共団体による鎮守の森潰しに対して、10年の歳月と私費を費やしてまで反対したのが南方熊楠(1867-1941)その人である。神社合祀という大々的な空間改変が、自然生態学的のみならず、人間の社会生態学的にまでも壊滅的な悪影響が及ぶという彼の感性が何よりの反対運動のモチベーションであったのであろう。南方は「空間の改変が人間の改変」であることを感性でもって鋭く察知していたのである。森との親しい「付き合い」を展開していた南方だからこそ、神社合祀とともに消されていく「鎮守の森」空間の存在価値を認識できていたのであり、「空間の改変は人間の改変」という、社会学的な範囲にまでその影響を予見できたのである。

以下に南方が遺した『神社合併反対意見』を列記したい。

- ①合祀により敬神思想を高めたりとは、地方公官吏の報告書は大いなる思い違いである。(南方[1971:573])
- ②合祀は人民の融和を妨げ、自治機関の運用を阻害す。(南方[1971:574])
- ③合祀は地方を衰微せしむ。(南方[1971:574])
- ④合祀は庶民の慰安を奪い、人情を薄くし、風俗を乱す。(南方[1971:576])
- ⑤合祀は愛郷心を損ず。(南方[1971:578])
- ⑥合祀は土地の治安と利益に大害あり。(南方[1971:579])
- ⑦合祀は勝景史蹟と古伝を湮滅す。(南方[1971:581])

以上7項目が南方の神社合祀反対意見である。

各項目毎には、実際に「神社合祀」という空間改変を断行したことによって顕在化した社会の崩壊や人間の崩壊が詳細に描かれており、当時かなりの混乱を招いていたことがうかがえる。これは明治期の「公共団体による鎮守の森潰し」の実例であるが、現代におけるそれとかなり共通項を見いだせるのではないだろうか。

合祀とはまさに、中央政府人間による一元的コンセプトの、空間への強制に過ぎなかった。①～⑦の反対意見の根拠にもなった「社会的・人間の崩壊」の実際の記録が語るように、「鎮守の森」空間の消失とは、その空間の物理的消失という次元以上の混乱を招いたことがわかるであろう。

## ii 節) 鎮守の森の特異性

時系列を現代へと引き戻して、改めて「空間の改変」へとメスを入れる時、「鎮守の森」のもつ複合的特異性と現代的意義が浮き彫りにされる。

鎮守の森が「聖地」として人々の畏怖の対象とされ、都市化の波にもその存在をつなぎ止めて

こられたのも、その空間には特異な存在価値が存在するからであろう。その極めてプリミティブな存在意義なるものをここでは3項目検証する。

## ii-1項)「急所」・「要所」としての鎮守の森

…この社も廃社となり、樹木をきるるところなれど、これを切ると、この大字中にここしかなき飲用水の大清泉、一丈四方ほどのものが濁り洩れるなり。(南方[1971:487])

明治に行われた神社合祀で、鎮守の森を伐採した際に至るところで水源が濁れたことが南方の記録が物語っている。そして現代でも同様の事態は頻発している。

鎮守の森が鎮座する場所はたいていが扇状地の扇頂や扇端である。それら特定の場所とは、地形的に池、泉、川、滝や地下水脈などの水源がちょうど合流しやすい地点でもある。つまり、それら水源の合流点である場所を聖地としたのがまさに「鎮守の森」であった。バシュラールが「水は人間の想像力を喚起する象徴としての自然性である」と言ったように、滾々と湧き出る水は、感性豊かであった先人にとって「生命力」の塊として畏敬するに十分な自然物であったのだろう。どれだけ日照りが続いても最後まで涸れない水源として、地域が干魃に陥った時や、災害時には村人の命を繋いできたのが「鎮守の森」の水源である。地域の「水源の配水ポイント」であり、稲作が生きる糧であった地域住民にとっての「灌漑ネットワークの結節点」という重要な核としての機能が「鎮守の森」にはあったのである。(上田[2001:20-21]) 地域にとって、涸渇することのない水源をもつ空間「鎮守の森」は、まさに「要所」であった。

また、全国を遍く植生調査した宮脇は以下のように結論づけている。

自然には、ヒトの顔でいえば頬っぺたのように、触ってもいいところと、指一本触れても駄目になる目のようにきわめて弱い部分がある。我々の祖先は、開発に際して目の中に指を入れなかった。すなわち弱い自然を残してきた。ヒトの顔のなかで目に相当する、人間の干渉に弱い自然とは、山のとっぺん、急斜面、海に突き出した岬、水際などである。そうした厳しい自然、弱い自然を象徴している場所に祠をつくり、この森を切ったら罰が当たる、この水源地にごみを捨てたら罰が当たるという宗教的な崇り意識をうまく使って、土地本来の弱い自然を残してきたのではないか。(宮脇[2000:58])

宮脇の植生調査より明らかになったこの事実は、鎮守の森の「急所」としての空間特性を高らかに実証するものであった。ここを崩すと全ての自然及び社会生態バランスが崩れてしまうような「急所」を、先人は「外なる自然」との対話という経験則によって守り遺してきたのである。

## ii-2項) ローカリティーの実像としての鎮守の森

宗教的なタブーによって、人為的な介入を免れていた空間であるからこそ、その空間には手つかずのままの原植生が息づいている。一元的かつ平板なコンセプトによる空間改変を免れた聖地なる「鎮守の森」は、今なおその地域固有の多様性を維持している。地域の風土に根ざした地域

による木が、その地域の固有性の具現として空間表現されているのが鎮守の森なのである。原植生が壊滅寸前にある現代において、ますますその現代的意義は色濃いものとなっている。

ローカリティー“locality”とは、民俗学者である南方が神社会社反対運動で最も訴えた「民俗」の本質そのものであるが、地域のものが地域に根ざしていることが必要十分条件であった。「生きたものを生きたまま、その場所で（コンテクストの中で）研究すること」を頑なに貫いた南方の生物研究手法が力強く物語っている。鶴見はこの南方の姿勢を次のように評価している。

…粘菌研究におけるコンテクスチュアリズムは、かれの民俗学研究のデータの蒐集法と対応している。かれは、民俗学のデータを、地球上のおどろくべき広汎な地域から取材しているが、同時に、それら事物を、それらが発生した脈絡から切り離さないように努力しているのである。（鶴見[1981:80-81]）

ここで言及されている「コンテクスト」には当然のこと、その空間に宿る履歴が含まれる。歴史性豊かな空間の、古伝（＝履歴）を消し去ることは、南方曰く「はなはだ学術上に損害あり」「ますます後日真を攪り古を失うの基なりなん」なのである。

中央主導で行われる空間改変とは、明らかに「ローカリティー」と「コンテクスト」を無視し、地域に根ざすことのない一元的コンセプトを強制する無謀な施策とはいえないか。地域という空間に、身体を配置しない中央公官吏達には「ローカリティー」と「コンテクスト」とは死んだ言葉でしかなかったからであろう。ローカリティーとは昨日や今日に成熟されたものではない。「風土」とも換言可能なそのローカリティーとは、「外なる自然」と「内なる自然」が互いにはたらきかけ、深化しあってこそ初めて成熟するものである。「人間が外界としての自然に対立するものとしておのれを見いだした時には、すでに人間はその自然の特殊性をおのれの特殊性としている」（和辻[1979:239]）のならば、「特殊性」を見いだしにくい都市とは、「おのれの特殊性」を見いだしにくい空間なのである。

### ii - 3 項) 感性解放の場としての鎮守の森

…日本人は匂いに敏感で鼻がよくきくのだそうです。[……]鼻のよかった日本人が、都市空間で鼻が荒くなってしまったんでしょう。うまいもの横丁のラーメンの匂いはかぎつけても、四季の移ろいの中の微妙な匂いは、もうわからなくなってしまったようです。（手塚[1989:132-133]）

都市とは、その規模が社会的刺激だけでなく、無限に多様な光景、音、匂いなどの物理的刺激を測り知れないほど多量に持ち込む空間である。そのため、人間の認知容量は過剰負荷の状態になり、自己では処理しきれない外部からの入力を回避すべく身体にそなわる諸感覚を自己防衛反応の一環として閉ざすのである。外部よりの入力に「圧倒されている状態」とは、過剰な環境によって無能力にされている状態を意味し、したがって人間は環境の要求に打ち勝てず、受動的に反応することになる。「心で反応するのではなく、脳で反応する」とはこの状態を指す。（エドワー

ド[1994:66])

都市はいつしか「コントロールされる空間」となってしまった。すべて計算で管理される脳化された空間。今や現象としての「自然」である「生老病死」さえも人工化され、剥き出しの「生老病死」に触れることはかなわなくなった。そうした都市空間に生きる人間の鈍化された感性を通して映し出される心性とは、平板で均質な、生命の煌めきとはほど遠い無機質なものとなる。

では鎮守の森ではどうであろうか。

鎮守の森は、植物生態学、生態学の見地から安定した「動的平衡状態」にある。そのシステム内で多様な動植物が再生、循環、自然淘汰され安定を保っているのである。高木、亜高木、低木、下草、さらに土の中のカビやバクテリア、ダニ類と、多様な生物がいがみあいながらも限られた空間でそれぞれの種の能力に応じて精一杯生き、それが多層群落を形成しているのである。(宮脇[2000:65])

都市を支配し、均質かつ直線的な「時計の時間」の居場所はどこにもない。

鎮守の森とは、都市の多量の物理的刺激に圧倒された状態である現代人にとって、無能力化されていた諸感覚に着せた鎧を外すことができる空間であるといっても過言ではない。そして鈍化された感性が澁刺と解放され発揚される空間なのである。

人工物のない鎮守の森へ入るということは、都市で隠蔽された自らの生命の力に触れることなのである。生命の根源たる無常に触れることは、とりもなおさず、自らの無常なる存在を確認するプロセスなのである。

そうした空間での自己了解は、外なる自然と内なる自然との根源的連続性を自覚できるような感性発動の契機となる。「感性覚醒機能装置」としての機能といえよう。

#### Ⅳ章. 結び

本論文の骨子である「空間の改変は人間の改変」という切り口で現代都市を解剖して見えてきたのは、紛れもなく「空間の改変は人間の改悪」であろう。かつての宗教的タブーによってコントロールされていた欲望抑制システムを放棄し、縦横無尽に外なる自然を蹂躪してきた人間に行き着く先があるとすれば、自ら犯した愚行への手遅れなる猛省であろう。

鎮守の森の特異性でも触れたが、現代における存在意義は枚挙に遑がないほどたくさんある。がしかし、南方が

…説教、理屈、実験を須たず、単に神社、神林の存在ばかりが、すでに人心の感化に大功あるなり。(南方[1971:578])

と言及しているように、そもそも「鎮守の森」そのものやその存在価値を言説でもって説き明かせるものではないのかもしれない。解き明かそうとするのが現代人ならば、感じとろうとしたの

が先人である。理屈や解釈ではなく、鎮守の森が「急所」「要所」であり、ローカリティーの濃縮された空間であることを見抜いたのは、先人の研ぎ澄まされた感性であった。

「鎮守の森」を遺すことで、現代人に先人と同じ感性を持ちうる効果があるとは言えない。なぜならば、都市に住まう現代人はあまりにも外なる自然との付き合いが希薄であるからだ。だが、地域に「鎮守の森」が存在していることで、まだ我々の目には映っていない「鎮守の森」の存在意義は眠っているはずである。

### 参考文献表

- 荒俣宏他著『南方熊楠 奇想天外の巨人』、平凡社、1995年  
 上田正昭編『探究「鎮守の森」社叢学事始』、平凡社、2002年  
 上田正昭・上田 篤編『鎮守の森は蘇る 社叢学事始』、思文閣出版、2001年  
 内山 節著『自由論 自然と人間のゆらぎの中で』、岩波書店、1998年  
 エドワード・クルパット著『都市生活の心理学 都会の環境とその影響』、西村書店、1994年  
 エルンスト・フリードリッヒ・シューマッハ著『スモールイズビューティフル 人間中心の経済学』、講談社、1986年  
 大倉精神文化研究所編『神典』、大倉精神文化研究所、1936年  
 掛谷 誠編『地球に生きる 環境の社会化』、雄山閣、1994年  
 ガストン・バシュール著『空間の詩学』、ちくま学術文庫、2002年  
 河合隼雄著『神話と日本人の心』、岩波書店、2003年  
 同著『中空構造日本の深層』、中央公論社、1999年  
 クライブ・ボンディング著『緑の世界史・下』、朝日選書、1994年  
 桑子敏雄著『環境の哲学』、講談社、1999年  
 同著『感性の哲学』、日本放送出版協会、2001年  
 同著『風景のなかの環境哲学』、東京大学出版会、2005年  
 堺屋太一著『日本とは何か』、講談社、1991年  
 神社本庁発刊『月刊若木』、2003年  
 関根正雄訳『旧約聖書 創世記』、岩波書店、1956年  
 鶴見和子著『コレクション鶴見和子曼陀羅Ⅵ 魂の巻 水保・アニミズム・エコロジー』、藤原書店、1998年  
 同著『南方熊楠』、講談社、1981年  
 デカルト著『方法序説』、岩波書店、1997年  
 手塚治虫著『ガラスの地球を救え』、光文社、1989年  
 中村雄二郎著『感性の覚醒 近代情念論の再検討を通じて』、岩波書店、1997年  
 福永光司著『莊子 内篇』、朝日新聞社、1978年  
 牧野和春著『鎮守の森再考』、春秋社、1994年  
 町田宗鳳著『山の霊力 日本人はそこに何をみたか』、講談社、2003年  
 溝口次夫他著『環境と宗教』、環境新聞社、2006年  
 南方熊楠著『南方熊楠全集 第7巻』、平凡社、1971年  
 宮脇 昭著『植物と人間 生物社会のバランス』、日本放送出版会、1967年  
 同著『鎮守の森』、新潮社、2000年  
 同著『緑環境と植生学 鎮守の森を地球の森に』、NTT 出版、1997年  
 安田喜憲著『日本よ、森の環境国家たれ』、中公叢書、2002年  
 山折哲雄著『鎮守の森は泣いている 日本人の心を「突き動かす」もの』、PHP 研究所、2001年  
 和辻哲郎著『風土 人間学的考察』、岩波書店、1979年